高専に任せろ！2018

第4部 広がる舞台 ㊦

学んだコンピューター音楽に生かす 武器になった技術・心構え

作曲家 横山克さん

よこやま・まさる 長野高専から国立音楽大学に進学。「ももいろクローバーZ」などアーティストへの楽曲提供のほか、映画「ちはやふる」3部作の音楽も担当。長野県出身

高等専門学校（高専）卒業生の活躍の場は企業だけにとどまらない。実習を通じて課題解決能力を養ったり、論理的な思考プロセスを磨いたりする高専教育。それらは様々な場面で力を発揮する。高専から音楽とスポーツの世界に飛び込んだ異色の2人に注目した。

都内のマンションの一室に、作曲家の横山克さん（36）のプライベートスタジオがある。

これまでに映画やアニメ、ドラマ、CMなどの楽曲を手掛けてきた。関わった作品は、映画「ちはやふる」3部作（2016～18年）をはじめ、変々な場面で力を発揮する。高専から音楽とスポーツの世界に飛び込んだ異色の2人に注目した。

都内のマンションの一室に、作曲家の横山克さん（36）のプライベートスタジオがある。

これまでに映画やアニメ、ドラマ、CMなどの楽曲はほぼソフトウエアで制作するという横山さんは、「私にとって音楽とコンピューターは同じものなんです」と笑顔を浮かべた。

「音楽＝コンピューター」という構図は、長野工業高等専門学校（長野市）から国立音楽大学（東京都立川市）に進んだ経歴にも表れている。

3歳から伯母のピアノ教室で音楽の基礎を学んだ。「言われた通りの課題をこなすだけの練習が嫌だった」といい、小学生から自分で作曲を始めた。中学生になるとコンピューターへの関心が高まり、シンセサイザーやパソコンで作曲するようになる。その流れから、高校は長野高専の電子情報工学科でコンピューターを学ぶことに決めた。

高専に入ると「こんな変わった環境はなかなかないと思った」。周囲には天才肌の学生が数多くいた。ある友人は文化祭で、電車の玩具にカメラやモーターを搭載し、パソコンから電車の運転が体験できる仕組みを披露。横山さんを驚かせた。

授業は厳しく、山のようなリポートに追われ、「留年の恐怖と戦いながら過ごした」という。

高専での学生生活は充実していたが、高学年になると、やはり音楽への熱意が高まってきた。伯母や、敬愛する作曲家の久石譲氏が通っていた国立音大を目指すようになる。プログラミングによる作曲方法を学び始めたのもこの頃だ。

卒業後は国立音大の作曲学科に進学。大学時代には自分で作曲した曲をCM制作会社などに持ち込み、積極的に営業をかけた。高専時代の実践的な環境と経験が「行動力につながった」という。

少しずつ人脈や仕事を獲得し、大学在学中から音楽活動を始めた。

いま横山さんはネットを介して、海外のアーティストと仕事をすることも多い。「IT（情報技術）を使えばこれまで難しかったことが簡単になる。例えば東京にいながら、スロバキアのステージで一緒に音楽をレコーディングすることもできます」。芸術表現に新しい技術を組み合わせる「メディアアート」にも興味があるという。

「国や地域によって、音楽のダイナミックさやリズム感も変わる。机の上で楽譜を書いているだけでは、世界が狭い」

高専時代に学んだ技術や心構え。それは音楽という土俵で横山さんが戦っていくための、重要な武器となっている。

（佐藤雅哉）

ドラフト2位 初のプロ野球選手

労力いとわぬ魂 健在

読売ジャイアンツ 鬼屋敷正人さん

きやしき・まさと 近畿大学工業高専からドラフト2位で読売ジャイアンツ入団。17年に現役を引退し、18年からブルペン捕手を務める。三重県出身

高専出身者で初のプロ野球選手が読売ジャイアンツの鬼屋敷正人さん（27）だ。近畿大学工業高専（三重県名張市）では強肩の捕手として甲子園を目指しながら、情報処理を学んだ。今はブルペン捕手として、チームを縁の下で支えている。

「第二巡選択希望選手、鬼屋敷正人」。09年のプロ野球ドラフト会議。当時高専3年生だった鬼屋敷さんが指名された瞬間、会場がどよめいた。

近大高専との出会いは小学生時代に遡る。柔道は、自宅近くの近大高専に柔道の試合をよく見に行ったという。中学校で野球部に入り、頭角を現す。高校でも野球を続けたいと考え、野球部に力を入れていたなじみ深い近大高専を進路に選んだ。

高専の学生は1～3年生のときに高校生の大会に出場し、4、5年生になると高専の大会に出る。「本気で甲子園を目指していた」と鬼屋敷さん。平日は放課後に夜9時まで、休みの日も午前中から夜7時まで練習に明け暮れた。海岸沿いを走り込むこともあった。

学業をおろそかにしない技術を組み合わせる「メディアアート」にも興味があるという。

「国や地域によって、音楽のダイナミックさやリズム感も変わる。机の上で楽譜を書いているだけでは、世界が狭い」

高専時代に学んだ技術や心構え。それは音楽という土俵で横山さんが戦っていくための、重要な武器となっている。

（佐藤雅哉）

高専3年生をドラフト指名の対象とするルールを明文化。道が開けた。

しかし晴れて入団した後は試練が待ち受けていた。鬼屋敷さんはプロの捕手のレベルの高さに驚いた。「送球の速さや精度、すべてが異次元だった」。13年と14年には1軍の試合に1試合ずつ出場したが安打はなし。17年には戦力外通告を受け、引退を決意した。

「高専での厳しい練習のおかげでプロ選手になれた。そして野球を続けてきたからこそ今がある」。鬼屋敷さんはそう胸を張る。高専では午後5時まで実習を受けた後に練習に向かうこともあった。テスト前には「悪い点をとったら監督に合わせる顔がない」と練習後に必死で勉強をした。

18年からブルペン捕手を務める。全国各地の球場に帯同し、試合前に投手の球を受けて調整を助ける役割だ。責任感の強さと労力をいとわない高専魂は、今も健在だ。

（鈴木泰介）

許諾番号30066423 日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。

掲載日 2018年11月21日 日経産業新聞 003ページ

(C)日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。